手話だより

令和4年度　11月号

～　手話検定試験を行いました！　～

8月22日(月)に、二年ぶりの長岡聾学校での手話検定試験を行いました。今年度は、5級13名・4級6名が受験しました。5級と4級は、手話の読み取り筆記試験と、面接試験で行われます。

受験者の方々へ、検定試験を受けてどうだったかインタビューしました！

◇インタビューの内容　①手話検定試験を受けようと思った理由は？
②手話検定試験の勉強方法は？
③手話検定試験を受けて、どうでしたか？

Ｙさん
（5級受検）

①新しい手話を覚えたいのもあったけれど、なにより私は将来、手話を教えられるようになりたいからです。受検をして、自分がどれだけできるか知りたかったからです。
②動画、本を見て、何回も覚えるまで練習しました。
③面接のとき、その場でテーマが発表されるので、あせりました。読み取りは、だいたいは分かったのでよかったです。

Ｔ先生
（5級受検）

①手話がなかなか上達しないため、自分への叱咤激励の意味を込めて受検しようと考えました。
②試験対策用 DVD
③手話を集中して覚えるためによい機会となりました。

Ｓ先生
（5級受検）

①手話を覚えて、生徒・先生達とコミュニケーションをとりたいと思ったからです。
②手話検定対策のテキストと DVD
③手話を覚えるきっかけになりました。試験をうけてから、コミュニケーションを取ろうとする意識が高まり、手話単語を覚えようとする数が増えました。

Ｋ先生
（4級）

①普段はあまり手話を使う機会がありませんが、少しずつ勉強を続けてきたので、自分の力を試したいと思って受けました。
②手話検定対策の DVD や過去問題集を借りて、一通りやりました。わからない手話表現は、手話辞典やインターネットですぐに調べることを心がけました。学校での手話検定対策講座に参加して、読み取りや面接の練習をしました。
②読み取り試験はテキストで学習した手話表現が多く出てきて、思っていたよりスムーズに答えられました。面接では、学校での対策講座でも練習したテーマだったので、落ち着いて取り組めました。面接官の方が、にこにことうなずきながら聞いてくださったので、楽しく会話ができました。

全国手話検定試験は、毎年全国で行われています。毎年案内していますので、ご興味のある方はぜひ来年度の試験に挑戦してみてください。

CODA(コーダ)として生まれて

小学部：金垣秋子

皆さん、“CODA(コーダ)”という言葉を知っていますか。“CODA(コーダ)”とは、“Child of Deaf Adults(チャイルド・オブ・デフ・アダルツ)”の頭字語で「聾の両親から生まれて育てられた子」という意味です。今年のアカデミー賞 3 部門で入賞した映画作品『Coda コーダ　あいのうた』をご覧になって、この言葉を知った方もいらっしゃるのではないでしょうか。

ご存じの方もいらっしゃいますが・・・、実は私も CODA(コーダ)の一人です。両親は聴覚障害者で、新潟聾学校(現新潟よつば学園)の卒業生です。今回、縁あって手話だよりに寄稿する機会を得ましたので、CODA(コーダ)としての私の育ちについて、少し紹介させていただきます。

私の実家は胎内市にありますが、いつも聾者が集うサロンのような家でした。両親が陽気な性格だったので、いつも笑いが絶えないにぎやかな家でした。集う年齢層も幅広く、両親と同年代から聾学校を卒業したばかりの人、新潟聾学校高等部に通学していた女の子などもいました。当時はろうあ運動も活発で、聾者の普通自動車免許取得もようやく認められた頃でした。父は早々に普通自動車免許を取得して、友達に免許取得に向けてのレクチャーをよくしていました。みんなが会話している輪の中に、当時子どもだった私もいましたが、手話は私にとってごく当たり前の自然発生的な言語でした。母の友達は、我が家の台所を、自分の家の台所のように熟知しており、よく一緒にお料理を作りました。みんなで登山や海水浴にも行き、まるで大家族のように過ごしていたことを、今も鮮明に覚えています。

私の大学進学が決まると、父の車に引っ越し荷物を押し込み、両親と私の三人で、宮城県仙台市のアパートに向かって出発しました。引っ越し荷物の搬入を終えて実家に戻る両親を見送る際、父の車がだんだん小さくなるにつれ、私の涙はどんどん溢れました。父の車が見えなくなっても、一人、車の方向をじっと見て、ただただ泣いていました。父や母の笑顔が思い浮かび、寂しくて心細くて泣き続けていました。今、思い返してみても、あれだけ泣いたことはありませんでした。あの日、帰路に就いた父の車中で両親も号泣していたことを、翌日、母からのファックスで知りました。

あの日から〇〇年、父は平成19年12月11日65歳で逝去。母は元気に長岡の我が家で同居中です。人生山あり谷ありとは、よく言ったものです。私は大学を卒業して社会人となり、現在は長岡聾学校で勤務する立場となりました。CODA(コーダ)として生まれて、私は手話と日本語の二つの言語を使いながら生活していますが、自分の母語である手話を使いながら聾学校の子ども達や聾の先生方と会話できることに大きな喜びを感じています。

かつて、私が子どものころに注いでもらった大勢の人たちの愛情を、今度は私が聾学校の子ども達に注いでいけたら嬉しいです。

父と私(３歳)が、月岡動物園に向かって歩いている写真

新潟県ろうあ者大会交流会（in 胎内）の写真

前列中央：母
前列右：江花さん
後列左：長谷川先生
後列中央：私
後列右：石川さん